

## 〈論 評〉

## 新島淳良氏の批判に答える

(弘前大学教授) 中屋敷 宏

本誌9月号に掲載された拙書『中国イデオロギー論』に対する新島氏の書評は、私の方法に対する全面的な否定を内容とするものであった。本来書評というものは、それを読んで自分の到らなさを反省する資とするものだと考えてきたが、このような全面否定を内容とする論争的な書評に出えば、そうとばかり言うてはおれない気持ちになる。一言何かを言うことが、書評を書いて下さった人に対する礼儀というものであらうとも思う。そのような次第で、以下新島氏の批判への回答と氏への反批判を書かせていただくことにした。

氏の私に対する批判は「私の異和感は、さしあたって、(1)共同体（とくに原始・氏族共同体）は、国家と対立する原理たりうるか、(2)人間的（非人間的の対立概念としての）とは、第一義的にはどうということか、の二点にしばられる」と言われるように、二つの問題についてである。そして第一の問題に対して氏は「上下関係を共同体の外の、氏族間や国家間の戦争や国家権力による支配搾取だけに限定して、国家＝悪、共同体＝善玉という図式で歴史を裁断する著者の方法は安易すぎると思うのである」と言われる。次いで第二の問題に対しては、「種または集団全体に共通の、すなわち一般的なるものを伝達する言語（イデオロギー）は非人間的（動物の言語と同じ）であり、個の情緒（思想を含む）を表現する芸術こそすぐれて人間的なのである。ところが、著者は個（私）を抹殺して「公」（一般性）に同化することを強制する文化を最も人間的、道徳的（／＼）だとみとめる」と、ここでも私の見解を全面的に否定される。新島氏の私への批判は、以上のように要約できるも

のである。

まず第一の問題であるが、私は共同体の原理は国家の原理と対立する原理たりうる、と考えている。なぜならば歴史的に見れば、国家とは氏族共同体の生活原理を否定する公的権力として、氏族共同体の中から生成してきたものであるからである。これは私の独自の見解などと言ったものではなく、エンゲルスが「家族、私有財産および国家の起源」において展開したマルクス主義国家論のイロハである。そして私はこの論理は正しいと思っている。しかし、私が中国の国家に関して言った事は、このような公式論だけではない。私はおよそ次のような事を言った。即ち中国では氏族の絆帯が強く、氏族共同体は内部の階級分化によって分解し去り、国家の形成までは進みえなかった。むしろ中国で国家の形成に決定的な契機となったのは、氏族間の戦争、征服であり、従って中国の国家は非常に暴力的、専制的な性格を帯びねばならなかった。このような中国的国家の生成過程と成立基盤が、その国家権力に、氏族共同体から強く拘束されることを宿命づけた。それが「聖王」や「仁政」のイデオロギーで自己の存在を修飾せねばならなかったのは、国家権力が氏族共同体の伝統から受けている被拘束性を示すものである。国家権力が氏族共同体から拘束を受けているとすれば、被支配者の側が自らを主張するために依拠したものも、やはり氏族共同体の伝統であった。彼等は国家権力の存在を否認するために、いたずらに氏族共同体の伝統を美化した。そこに民衆の反権力の思想や反乱の思想が生成した。従って、中国におけるイデオロギー世界における階級闘争は、「共同体」をめぐる展開されることになる。どちらがより完全で、美しい「共同体」のイメージを領有することに成功するか、そこにイデオロギー闘争の成否がかかっていた。非常に簡単に要約すれば、以上のような事を私は述べた。

このような見解に基づいて、私は中国思想を分

析する方法的概念としてイデオロギー論に「共同体」という概念を導入したのである。しかし、私が「共同体」に言及したのは、そこまでである。私は氏族共同体が人間の理想の社会だとか、そこに我々は復帰すべきだとかといった類の主張は全くしていない。ところが新島氏は、私が方法として使用した「共同体」を、現実の「共同体」と混合される。そして自分の山岸会での体験や魯迅の小説などに依って、現実の「共同体」が「上下関係とその意識の支配する社会であった」などと主張される。当然の事である。国家に統括されるようになった時代の、社会の基層にある「共同体」が、階級社会の影響を受けないなどという事はある得ないからである。それは階級社会の論理によって変型され、階級社会の中にくりこまれざるを得ないだろう。国家権力の支配が確立した時代に、どこかの社会の片隅に「ユートピア」的共同体が存在できるなどと考える方がおかしいのである。氏の第一の問題に対する私の見解への否定は、論理としては成立しないのである。

第二の問題であるが、ここで言う「人間的」という内容についての氏の批判は、全く見当外れであるが、そのことはまあいいであろう。ここで私の主張したかったことは、次のような事である。氏族共同体から階級社会への転化の過程で、決定的な役割をはたしたものに人間の私欲がある。自分の欲望充足のために他人を利用、搾取、支配する。あるいは共同体それ自身をすら利用する。といった類の共同社会と対立するに到った人間の欲望である。階級社会は、このような人間の欲望を原動力として運動してきた。しかし、どここの社会でもそうであるが、このような人間の欲望のあり方に対しては、常に宗教や道徳といった形での批判が存在した。中国では特に強烈な道徳思想という形で、それは存在した。「エゴイズムを放棄して社会に融けこむ」という理想は、そのような思想の一つである。私はこの思想は、すぐれて高い

人間的内容を持っていると考えている。私が毛沢東思想や整風運動、文革に関心を持ち、それに今も一定の評価をしているのは、この点にかかわっている。私は毛思想とその運動を、中国の民族的理想の実現を目指したものだと考えているのである。

しかし、文革は無残な失敗に終らざるを得なかった。その犠牲はあまりに大きく、悲惨であった。だが故に毛思想と訣別し、それをボロ布のように投げ捨てることは簡単である。そしてそれは現在一種の流行でもある。しかし、私は毛沢東思想と文革とは、簡単に投げ捨てるにはあまりにも貴重なものをその中に持っていると考えている。私が毛思想の中で貴重だと思うのは、それが被支配階級の人間が常に理想としてきたし、そして支配階級の人間にすら影響を与えてきた「人間」の理想の実現を目指すものであったからである。階級社会を「人間」の側から止揚しようとする歴史的実験であると言ってもよいであろう。そのようなものとして、毛思想と文革は現在も大きな問題を我々に投げかけていると思う。この問題はあまりにも巨大である。しかし、文革とは違った意味での「地獄」を現出しつつあるこの日本に生きる人間の一人として、私はこの問題を考え続けていきたいと思っている。

最後に新島氏へ一言したい。氏は私が整風運動の論文を書き、文革に共感と異和感を抱いたということを取りあげ、自分と似たようなものである、といった感想を述べられている。冗談ではない。私は氏ほど文革を礼讃しなかったし、その後も鮮やかな身振りで変身してもいない。十数年にわたって、そして現在も氏が捨て去られた問題にしがみついている。あの拙書はその産物なのである。氏と私とを一緒にされては困る。これこそ「かなわんなァ…」である。